

『しのびね』論続補遺

大倉 比呂志

『しのびね』は中世王朝物語全集の一環として一九九九年六月に刊行され、二〇一五年十二月には岩坪健によって本格的な最初の注釈書である『しのびね物語』注釈』が和泉書院から出版されたが、いまだ中世王朝物語の注釈は発展途上の状況であり、今後十分な基礎的研究が必要であると考えられる。稿者も十年前前に『しのびね』論補遺」(『学苑』二〇〇五・1。後に『物語文学集攷』平安後期から中世へ』に所収 新典社 二〇一三・2)をものしたが、その後新たに気付いたことを述べたい。

一 『とはずがたり』との関係―帝と女君とのやり取りから―

内大臣を父に持つ男君は嵯峨野で偶然発見した故中務卿宮女である女君と幸福に暮らし、二人の間に若君をもうけたが、左大将の申し出により、男君はその娘(以下、姫君と称する)と結婚するように父親から迫られ、挙句の果てには若君までもが父親に引き取られることになった。男君は仕方なく姫君と結婚はしたものの、姫君のことは気に入らず、女君との生活に明け暮れていた。男君は帝から物忌みのために一週間宮中で一緒に籠るように要請されたので、この事情を知らずに女君が男君は姫君に心移りしたと思うのではないかと懸念して手紙を女君に出すわけだが、男君の父親が隨身と共謀して女君のもとにその手紙を届けないという策略を思い付く。というのは、男君を姫君と結婚させ、左大将の助力で男君の出世を願望している父親は、これを男君と女君とを引き離す絶好の機会だと考えたからだ。そこで父親は女君あてに、

①「中将(男君)は、『かしこ(注―左大将邸)にいましばし侍らん』と申しつる。よも近きほどはまゐり侍らじ。つれづれなるべければ、いづかたへも立ち出でてなぐさみ給へ。中将帰り侍らば、御迎へ奉らん」(四七―四八)

という手紙を送ったので、女君の母尼君は知人の内侍に相談したところ、内侍の勧めもあって、女君は母親ともども宮中へ失踪する。そこで内侍は女君に老いた自分の代わりに宮仕えするように説得し、帝にも女君のことを話したために、帝が女君の部屋に闖入して、その美貌に驚き、女君を恋慕して、内侍に苦悩を訴えた件は、

②(女君ハ)顔を引き入れて泣き給へば、「さりや、あな心苦しや」とて、日も暮るれば、(帝ハ)帰らせ給ひても、なほいかにすべきなど思しわづらひて、内侍を召して、「この人(女君)に目はなつな。いみじくもの思ひたる様あるを、缺など取り隠せ。ただいまは、いかなりともなぐさむべき気色もなきを、よくいひ教へよ」と(帝ガ)おほせらるれば、さればよ、(帝ノ)御心の(女君ニ)うつろひにけりと(内侍ハ)見奉りて、「みづからのなぐさめにはよらじと見奉るを、なほ御なぐさめにこそ」と申せば、「何ごとを、かくは思ひほれたらん。そこに知らぬことあらじ、聞かせよ」との給へば、「心に入れて問ひ侍ることも侍らねば、みづからまた問はず語りも何かし侍らん」と奏するに、……(六〇)

とあるように、帝が女君を恋慕する状況が語られている。

ちなみに、現存『しのびね』は改作本であるが、文永八年（一二七一）に成立した『風葉集』に三首の和歌が採られており、『とはずがたり』の書き出しが奇しくも文永八年元日から始められている点を考えると、以下に述べるごとく、作者二条は『とはずがたり』を執筆するのの際して、『しのびね』を参考にしたのではなからうか。

その『とはずがたり』によれば、後深草院（以下、院と称する）にとって初めての女である二条の母親「典侍大」のことが忘れられず、そのうえ、母親が二条の父である大納言久我雅忠と結婚したために、母親の面影を慕って、その娘二条が四歳の時、院御所に引き取ったのである。文永八年正月、二条が十四歳になった折、二条の実家を訪れた院に強引に情交された後、院御所で暮らすことになるわけだが、文永十一年十一月十余日、大宮（藤原姞子。後嵯峨院のもとで、後深草・龜山両帝の母）と院に前斎宮（後嵯峨院皇女愔子内親王。院とは異母兄妹）が嵯峨殿で対面することとなり、二条も随行する。院が前斎宮に対面した後の件は巻一で次のように語られている。

③御物語ありて、神路の山の御物語など、（前斎宮ハ）絶え絶え聞こえたまひて、「今宵はいたう更けはべりぬ。のどかに、明日は嵐の山の禿かぶろなる梢どもも御覧じて、御帰りあれ」など（院ハ）申させたまひて、わが御方へ入らせたまひて、いつしか、「いかがすべき、いかがすべき」と仰せあり。思④ひつること（注一院が前斎宮を恋慕したこと）よと、（二条ハ）をかしくてあれば、「幼くより参りし験に、このこと申しかなへたらむ、まめやかに心ざしありと思はむ」など仰せありて、やがて（二条ハ前斎宮ノモトニ）御使に参る。

院は前斎宮に対面した後、前斎宮を恋慕して、情交することを望み、二条にその仲介を頼むのである。

ところで、院と前斎宮との情交は、

④いたく（院ガ）御心も尽くさず、はやうち解けたまひにけりとおぼゆるぞ、余りに念なかりし。（前斎宮ガ）心強くて明かしたまはば、いかにおもしろからむとおぼえしに、明け過ぎぬ先に（院ハ）帰り入らせたまひて、「桜（注一前斎宮の比喩）は匂ひはうつくしけれども、枝もろく、折りやすき花にてある」など仰せありしぞ、さればよとおぼえはべりし。

と語られているところからすれば、余りにも簡単に前斎宮が院に情交を許してしまったのである。二条は院との情交が一晩目は院の来訪前に眠ってしまったために不成立に終わったが、二晩目にはレイプに近い状態で犯されたことから、前斎宮とは相違して抵抗したのという気持ちを含めて、前斎宮を見下した結果、傍線部のような感懐を抱いたと語られたのではなからうか。それに対して『しのびね』では、女君は帝との情交を拒絶し、男君の出家後に、帝は女君と対面した以降のことを次のように語っている。

⑤「ただ（女君ヲ）つれてまゐれ。（女君ノ）みづからの心にまかせては、いかかぎりあるべき。いとむくつけきわざかな。かかるためしやはある。磨がかく心をつくしたることこそ、いまぞ覚えね。ことし三年が間、安き空なく、心を見るにさらになびきたきは、契り遠うてにくしといふらんこととにや。いまは中納言（男君）も都になければ、はばかりるべきにもあらず。そこによくいはぬぞ」と、まめやかにつらしと思して、（内侍ニ）聞こえさせ給へば、……（九三）

⑥「さのみ（女君ガ）人の心をつくさせ給ふこそいとわりなけれ。この三年は、いみじく御心に従ひて、過ぎしきぬ。いまはまた少しあはれとも思ひ給へかし」と、（帝ガ女君ニ）いろいろに聞こえ給へば、……（九四）

帝は内侍と女君に嘆訴し、女君への内侍の説得とも相俟って、女君はかろうじ

て帝に情交を許すのである。その間の帝の焦燥を表象しているのが、二個所にわたって帝が語っている傍線部の「三年」ということばなのだ。^{注①}とすれば、両作品の帝と女君、院と前斎宮との情交への過程は余りにも対照的ではあるが、両者の情交に至るまでの経緯が語られているという点では類似している。前述したごとく、二条自身も前斎宮のように直ちに情交に至ったのではないという点から、④の傍線部には院と直ちに情交を結んでしまった前斎宮に対する二条の負的评价が語られているのではなからうか。もちろん、『とはずがたり』は概ね二条の体験通りに語られているという点で、物語である『しのびね』と同一次元では論じられないにせよ、②の④⑤と③の④⑤とにおける類似的表現に注目すると、作者二条は何らかの点で『しのびね』を参考にしたのではないかと推測されるのだ。とすれば、④の傍線部の背景には二条が前斎宮の場合とは異なるという自負と、容易には帝に情交を許さなかった女君に対する賞讃が読み取れるのではなからうか。だからこそ、作者二条は前斎宮に対する自身の感懷を傍線部のように語っておく必要があったのではなかったか。

さらに、女君の苦悩は何に由来するのかという帝の内侍への質問に対して、女君が自身の苦悩を「問はず語り」することはしないだろうと内侍が帝に返答している点を逆手に取って、作者二条は自身の人生史を「問はず語り」しようとしたのではなからうか。とすれば、『とはずがたり』という題名には作者二条の自負と女君への賞讃の意が籠められているとも考えられるのである。

二 『竹取物語』の影響―女君と「かぐや姫」との同化と異化

帝は女君の沈思し続ける状態を見て、男君との悲恋を察知し、内侍に尋問する。そこで内侍は女君に対して、次のような発言をする。

⑦姫君（女君）には、「（男君ト恋ハ）よろづかひなきことに思しなして、上（帝）の御覧じ侍らんとし、さのみしづみてな見え奉り給ひそ。いとかたじ

けなきこととは思さずや。いまは、たとへ御みづからの心ゆきて、（宮仕エニ女君ヲ）出だし奉るとも、上のよしと思し召すまじくは、この身（注―内侍）も面目うしなひぬべし。（女君ガ宮中カラ退出スルコトハ）いと便なきわざぞ」と、（女君ガ）げにもと思ふべくこしらへ給へど、「世にあらんと思はねば、人のかたじけなきことも知らず」とて、（女君ハ）いよいよ臥ししづみ給へば、……（六四―六五）

傍線部の女君の発言はかなり強硬なものであって、「人」は内侍や母尼君の可能性もあるが、やはり帝を対象としたものと考えるべきだろう。^{注②}とすれば、帝に畏怖を感じていないがごとき内容である。これは『竹取物語』における「かぐや姫」の発言と通底するものではなからうか。それは五人の貴公子による「かぐや姫」への求婚が失敗に帰した後、帝は「かぐや姫」の様子を見て来るようにと内侍中臣のふさ子を翁邸に遣わした件に、

⑧かぐや姫に、「はや、かの御使（注―内侍）に対面したまへ」と（姫ガ）いへば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず。（内侍ニ）いかでか見ゆべき」といへば、「うたてものたまふかな。帝の御使をば、いかでかおろかにせむ」といへば、かぐや姫の答ふるやう、「帝の召してのたまはむこと、かしこしとも思はず」といひて、さらに（内侍ニ）見ゆべくもあらず。（姫モ「かぐや姫」ヲ）うめる子のやうにあれど、いと心はづかしげに、（「かぐや姫」ガ）おろそかなるやうにいひければ、（姫ハ）心のままにもえ責めず。姫、内侍のもとに帰りにて、「口惜しく、この幼き者（注―「かぐや姫」）は、こはくはべる者にて、対面すまじき」と申す。内侍、「『かならず（「かぐや姫」ヲ）見たてまつりて参れ』と、仰せごとありつるものを、見たてまつらではいかでか帰り参らむ。国王の仰せごとを、まさに世にすみたまはむ人の、うけたまはでありなむや。いはれぬこと、なしたまひそ」と、言葉はづかしくいひければ、これを聞きて、まして、かぐや姫聞くべ

くもあらず。「国王の仰せごとそむかばはや、殺したまひてよかし」といふ。

とあり、二個所の傍線部には〈かぐや姫〉の地上における強い結婚拒否があるとしても、帝に対する拒絶姿勢が語られている。

さらに、帝は〈かぐや姫〉が「宮仕へにいだしたてば死ぬべし」と翁に言っているのを聞いた後、狩を装って翁邸を訪れ、〈かぐや姫〉を宮中に連れて行くこうとして、「(帝ガ) 御輿を寄せたまふに、このかぐや姫、きと影になりぬ」と語られている。もちろん、〈かぐや姫〉は人間界の人物ではないので、姿を消すことは可能ではあるものの、ここでもまた帝に対する強い拒絶反応を発動させている。

ところで、〈かぐや姫〉は地上において男関係が皆無であったのに対して、女君は最初のうちは帝を拒絶していたものの、前述したごとく、三年を経過した後には、帝に押し切られる形で情交を結び、昇天した〈かぐや姫〉とは異なっていて、宮中に永住することになったという点では大きな差異を生じているわけだが、女君が帝への強い拒絶姿勢を取った背景には男君に対する強烈な恋慕が拘束力を持っていた点を看過することはできない。

以上のように、〈かぐや姫〉の帝への強硬な発言の影響を受けて、女君は造型されたのではなからうか。〈かぐや姫〉の影響は、例えば『夜の寢覚』の女主人公中君や『とりかへばや』の女大將に表象されるごとく、「かぐや姫症候群」^{注③}なる現象が顕著であるが、この女君にもその影響が及んでいる点を考える必要がある。

三 男君と帝をめぐる「人」表現―その特異性への凝視―

男君の呼称は出家するまでは「中将」「中将殿」「中納言」「中納言殿」と官職名中心に記されており、帝の会話文中では二個所「公経」という実名で記さ

れているわけだが、一般的に実名で記される場合には召使階級であるのが通例である。帝の立場からすれば、男君の父親がいくら内大臣ではあっても「公経」は臣下であり、実名による呼称は身分の上下関係を顕在化させることになる。だが、地の文で男君が「公経」と記されるのは、女君が宮中に移居して以降のことであり、

⑨(男君ハ女君ガ失跡シタタメニ)せめての心やりどころに、ひきつくろひて、内裏へまゐり給へり。雪かきくれて降りければ、御遊びあるべきとて、公経おはしますどなりければ、(帝ノ)御気色よくて、「今日の空はいかが」とて、御覧ずれば、(男君ハ)ありしにもあらずやせやせとして、いとどなまめかしく、うちにはひたるまみ・口つきなどを、御目とどめてまばられ給ふ。(六六)

の件は、帝のいわば寵児である男君が伺候しているわけだから、傍線部のように帝の満足している様子が語られているといえよう。とすれば、男君が「公経」と称される場合には、男君は完全に帝の支配下にあることが理解され、それは後に女君が帝に帰属させられる予兆としての役割を果たしているのではなからうか。

また、男君の呼称は女君の心中思惟において、

⑩さりとて、(女君ヘノ)中納言の志は、むげに変はらじを、関守(注―男君の父内大臣の比喩)のかたきにこそと思せば、……(五六)

⑪宮仕へも習はねば、すべき心地もせず、またいつしか世にありと聞かれ奉らんも、中納言殿の思さんことつまし。(中略)とのみ思して、……(五八)

と官職名で記されており、帝は引用文⑦の傍線部と後述する⑫を除いて、地の文と他者による会話文・心中思惟・消息文において、すべて「帝」「上」のどちらかで記されている。

ちなみに「人」表現では、例えば、

⑫(男君ト結婚シタ左大将姫君ハ)まづ、居丈のほとものものしく、額はれて、目大きに、色はあくまで白く、親の目にはよしと思ふらんと見えたりしも、まづ古里の人には、いひならぶべきかたもなし。(三三八)

⑬「さて、ありし人のおはせさんなるこそ心苦しけれ」と(男君ノ母内大臣北の方男君ニ)の給へば、……(五五)

の二例の「人」は女君を表わし、

⑭五月雨しげう、晴れ間もなき頃、この忍び音(注―女君)はいとど思ひのまさりて、恋ひしき人を夢にも見ばやと(女君ハ)思せども、まどろまれねば、夢もなし。若君をなりとも、いかにして見るわざしてんと、思しなげきけり。この数珠・御扇を忘れ形見と御覧じて、

うき人の形見の扇折々に涙をさそふ風ぞ吹き添ふと、うちながめて過ぐし給ふ。(九一)

の二個所における「人」に関しては、前者は女君の心中思惟、後者は女君の独詠歌の中で用いられているわけだが、両者とも男君をさしている。

ところが男君の出踪後、母尼君が女君を説得して、渋々ながら女君が帝のもとに出かける件は、

⑮我が心(注―女君の心中)にも、(母尼君ノ説得ハ)げにもとは思へども、なほ人^④は世を背き、身をやつして、ならはぬ様になり給ふに、我が身はつれなくて、人に見え奉らんことのかなくして、心もゆかぬなるべし。やうやうすかしこしらへられて、(帝ノ)御前へまゐり給ふ。(九四―九五)

とある。④の「人」は男君、⑮の「人」は帝をさしていると考えられる。ここで女君にとってライバルとなる二人の男が近接した個所において「人」表現で

記されているわけだが、男君については女君の側から「人」が用いられていることは前述した通りである。一方、帝に関しては前述の⑦において記されている「人」に若干問題はあまるものの、帝に「人」表現が使用されている点は看過できまい。この個所において「人」表現が男君と帝とにいわば同時に用いられている状況を考えると、女君の中では男君と帝の位置付けが互角になったことを意味するのではなからうか。それは男君の側に立っていた女君にとって、男君とは別世界の住人になったことを暗示すると同時に、帝の専属物になることが予兆されているのではないのか。そのように考えると、この二例の「人」表現は、女君に対する男君の離別と帝の接近という対照性を帯びてくるのだということを表象しているのだ。換言すればこれらの「人」表現は、女君の状況の変化の予兆が内包されている記号であったと考えられる。

* * * *

『しのびね』の本文は中世王朝物語全集により、漢数字は該当ページを示す。『とはずがたり』『竹取物語』―新編日本古典文学全集。なお、私に表記の一部を改めた個所がある。

注① この「三年」の意味と『伊勢物語』二十四段との関わりについては、

大倉『物語文学集攷―平安後期から中世へ』(第二部十一の①)。新典社二〇二三・2。初出、一九九九・3)を参照されたい。

② 岩坪健も『しのびね物語』注釈の【注】において、「死や出家を切望する者には、逆鱗に触れることなど恐ろしくないと述べている。

③ 久下裕利『変容する物語―物語文学史への二視角―』(新典社選書 一九九〇・10)。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)